鉄血の狐

ロア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鉄血の狐

【Ｎコード】
Ｎ８９００Ｚ

【作者名】
ロア

【あらすじ】
大好きな人がいた、今は許せない人がいる――幼馴染の命を奪った相手ともみ合いになり、真冬の夜に橋から転落した北村純。しかし次の瞬間には、人間ではなく狐の獣人の体に宿されて異世界に召喚されていた。魔法や魔物が存在する産業革命後の激動の近代ヨーロッパに似た異世界で、時代と世界の波に翻弄されながらも純は生きる。

プロローグ

大好きな人がいた、今は許せない人がいる――彼はその許せない、許したくない相手に声をかけた。

「……赤松吉宏」

赤松吉宏と呼ばれた男は、背後からいきなりフルネームで呼び捨てにされ、怪訝そうに振り返る。

振り返った先には、まったく見覚えの無い若い男が立っていた。眼鏡をかけた、日本のどこにでも溢れている凡庸そうな青年。

「誰だよ、お前……何の用だ？」

赤松は露骨に不審そうな表情を浮かべたまま、青年を上から下へと眺めた。改めて見ても、紺色のスーツを着た普通の青年だ。就職活動中の大学生か、社会人新米にしか見えない。

青年は髪を派手な金色に染め、耳にはピアスをつけて、一般人が想像するであろう典型的な不良、もしくはそれに類する容貌の赤松に睨まれても、顔色ひとつ変えなかった。普通ならば、怯えるなりなんなり、何らかの反応を示してもいいはずなのに。

相手の様子を完全に無視して、青年は静かに口を開き、彼の幼馴染の名前を口にした。

赤松の反応はわかりやすかった。驚き、そして硬直している。

「そうだよ、忘れてるはずがないよね。君が殺した人の名前だから」

青年は表情をまったく変えないまま、そう言った。赤松の背筋に

震えが走ったのは、冬の海風に吹きつけられただけではなく、その言葉に含まれた冷たさのせいだ。

「だ、誰だお前……どうしてそんなこと知ってるんだよ、畜生」

「別にそんなことはどうでもいいよ、ただ君と話がしたかったんだ」

赤松は目の前にいる青年が狂っているのではないかと思い、何か助けは無いかと周囲を見渡した。

真冬の夜の、河口に架かる大きな橋の上。歩道には電灯が明るく灯っているが、周囲に人影はまったくない。二車線の道路上は、時折車が通り過ぎていくが、歩道にいる二人には目もくれない。

相変わらず無表情の青年は、赤松の助けを求めるような視線の揺れがとまるのを待ち、それから続けた。

「君が殺した彼女は、僕の幼馴染だよ。それで本当に反省しているかどうか、話を聞きたくてね」

赤松は何も答えられなかった。ただ自分がはずみで殺してしまった相手の、幼馴染だと名乗る相手の言うことを聞く。

「少年法っていいなぁ、彼女はまだ何十年と生きたかもしれないのに、君は五年ちょっとで塀の中からこうして出て来てるわけだし」

そんな言葉がすらすらと青年の口から出て来る。赤松の頭にその言葉が入っていくと同時に、猛烈な怒りがわき上がって来た。

「うるせぇ、てめーにそんなことを言われる筋合いはねぇよ！」

陳腐な台詞とともに、相手の襟元を掴んだ。青年はされるがままだ。

「俺はな、もう罪を償ったんだよ！もう誰からも非難されるいわれはねぇ！わかったかこの馬鹿野郎！」

飛び散る唾と怒声を顔に浴びながら、青年は良心の呵責も何もあったものではないその叫びに、一言だけ応じた。

「……よかった」

直後、赤松は脇腹に走った痛みに仰け反った。まるで火傷をした瞬間のような、猛烈な痛み。

赤松が視線を下げて痛みの根源を見ると、そこには青年の右手と、黒いものが見えた。

「て、てめっ……！」

黒いものがナイフの柄で、刃は深く自分の脇腹に食い込んでいることを理解した瞬間、赤松は無我夢中で青年を押していた。必死で青年を押し離して、ナイフを抜こうとする。

電灯の灯りの下で、二人はもみ合う。押された青年の腰が橋の欄干にぶつかり、そして呆気なくそれを越えた。青年は、両手で赤松を掴んで放さなかった。

そこからは、ただ単純に重力に従うだけだった。橋の欄干を乗り越えた二人の体は、冷たい真冬の水面へと落ちていった。

遠のいていく橋の上の灯りを見ながら、彼はこれで本当によかっ

たのだろうかと自問自答していた――答えを出す前に、彼の意識は闇に沈んだ。

北村純（きたむらじゅん）が意識を取り戻して最初に考えたのは、自分は生きているのか、そしてここはどこなのかということだった。

純の目には、ここがどこかの地下室のように見える。煉瓦の天井と床、そして壁。薄暗くてよくわからないが、湿って陰気な空気はそこが地下室だと教えてくれているような気がした。

あの赤松にナイフを刺してもみ合いになり、真冬の河口へと転落したことまでの記憶はある。しかし、そこからこの目の前の状況へとまったく繋がらないので、とにかく純は混乱した。

「……！？」

今更ながら純は、自分が身動きひとつ出来ないことに気がついた。指一本動かせない。それどころか、声すら出すことができなかった。

視点の高さや向きから、自分が立った姿勢でいることだけはわかったが、それがどうしたという話だ。

正真正銘の金縛りに自分が遭っていることに気づいた途端、パニックの波に巻き込まれた。必死で動こうとすることばかりに意識が向き、まともな思考などあっという間に吹き飛んだ。

純が無駄な努力を重ねている間に、変化が起きた。壁際のランプのようなものからの灯りの陰で、何かが動いたからだった。純の視線がそこに釘づけになる。

「遂にやった……私は召喚に成功した」

しわがれた声が、純の耳に届いた。闇の一部が動いたと思ったら、そこから黒いローブを着込んだ相手が姿を現したのだ。
もし純に声を出すことが出来れば、きっと絶叫していたに違いない。純は金縛りという状況下で、相手のことを幽霊か何かとしか考えることができなかった。

「これは狐……？」

ようやく見えた相手の顔を見て、純は息をのんだ。浅黒い肌を持った女だ。しわが多く見えるから、年寄りだろうか。
召喚とか狐とか、意味のわからないことを呟いている相手が自分の近寄って来るのを見て、純は逃げ出そうと必死で手足を動かそうとするが、どうにもならない。
謎のローブを着た女が、純の眼前にまでやって来て、立ち止まる。

「でもこれからじっくりと調べていけば……まずは契約を」

やはり意味不明なことを呟いている相手がローブの内懐へと手をやり、そこから出て来たときには、その手には短剣が握られていた。ランプの薄明かりの下で、刃が鈍く光った。

殺される――純の中で、その思いだけが膨らんだ。得体の知れない女が刃物を手に迫ってきている、純としては殺されるとしか思えない。
こうなる前には、自分が相手にナイフを突き刺していたことなど、純の頭からは見事に欠落していた。

「や……めろ、近寄るなあぁ！」

純の口から声が迸り、次の瞬間には女が吹き飛んだ。見えない何かに腹を殴られたかのように、体を折り曲げて、本当に後ろへと勢いよく吹っ飛んだのだ。

「そんな、術をかけたのにっ……！？」

煉瓦の壁に叩きつけられた女は咳き込んだ後、信じられないと言わんばかりの様子でもらした。手近なランプがいつの間にか消え、さらに暗くなっている。

純にも何が起こったのかさっぱりわからない、声は出せたが相変わらず体は動かせないままだ。

「こうなったら多少傷つけて、大人しくさせてからでも」

自身に言い聞かせるように呟きながら、ふらりと女が立ち上がる。殺意というものが立ち昇っているように感じられて、純は恐怖のあまり頭がどうにかなってしまいそうだった。

落とした短剣を拾い上げ、再び女がこちらへと迫った瞬間――何かを壊すような激しい物音がその場に響き渡り、女が背後の闇へと振り返る。

「どうしてここに……あがっ！？」

女の言葉が、そこで途切れた。純の耳が次にとらえたのは、何か大量の水が床に落ちたような、重く湿った音。純は嫌な予感しかしない。

女がまた振り返って、自分へと両腕を突き出して、ふらつきながら近寄って来た。まるで映画のゾンビのような動きだった。

純は自分が悪趣味なホラー映画の被害者役にされていると思い、これが夢か何かであって欲しいと切実に願った。目を閉じればいいと思ったが、それすら出来なかった。

そして純は見た。女のローブの肩から脇腹にかけてがばっさりと裂かれ、その下の皮膚も同様で、どす黒い血が足元へと流れ出ているという現実を。

あまりの光景にもはや声すら出なくなっている純の目の前で、女の口が動き、それから一気に全身が燃え上がった。

人が燃えている、それを認識した瞬間、純は本当に狂いそうになった。

燃えながら恨めしそうに両腕を突き出したまま、女が自分に近づいて来る——純は自分が何かを声の限り叫んだ気がしたが、目の前が真っ暗になってそれ以上は何もわからなくなった。

プロローグ（後書き）

こういう場で小説を公開するのは初めてなので、いろいろと至らないところだらけですが、これからよろしくお願いします。

ご意見やご感想をお待ちしています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8900z/

鉄血の狐

2011年12月27日23時51分発行